

---

# Preludes

ホワイト

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

P r e l u d e s

### 【Nコード】

N 2 9 8 3 W

### 【作者名】

ホワイト

### 【あらすじ】

これらの作品は、物語の冒頭だけを書いたものです。それぞれの話の続きは予定しておりません。

また、もしこれらの作品を読んで自分なりに続きが書きたいと思ったのならば、それを掲載される際にご一報頂ければ自由に書いてもらって構いません。

登場人物の名前等も自由に変更してください。

それではどうぞ、お楽しみください。

## 1・C・d・u・r（前書き）

タイトルのとおり物語の導入部分でしかないものですが、そこから自由にお話を創造してください。

それではどうぞ。

登場人物の名前

佐倉 さくら

物井 天音 ものい あまね

# 1 . C - d u r

雲は青く晴れ渡った空を背景に、のんびりと流れて行く。

頬を撫でる風が心地よい。

景色は、思い出の中のものとして変わらないままだ。

九月の下旬、俺は、俺が生まれてから小学校低学年までを過ごした町の駅に、八年ぶりに降り立った。

駅の周囲にはほとんど何もない。あるのは畑と、民家がぼちぼち、そして駅前の食堂兼売店だけだ。コンビニなんてのはもっての外、そもそもこの町にコンビニなんてものが存在するのかどうか疑わしい。そもそも電車が一時間に一本しかないような場所にそんなものを求めるのが間違っていると思う。だが、都会から来た身には、これから暮らす場所にコンビニがないというのは結構辛い。

「ま、グチグチ言ってもしかたない、か。」

とりあえず駅から出ないことには何も始まらない。ということでホームを見渡してみるのだが……

「改札口はどこだ？」

駅、と言ってもホームしか見当たらないのだ。とりあえずホームの端まで行くと、ポストのようなものが立っていて、そこにこう書いてある。

『使用済のきっぷはこちらに入れてください』

……駅員はいない。まあそもそも駅員がいるような建物自体がないのだから当然といえばそれまでだが。

その箱に切符を入れ、駅の外に出る。改めて周囲を見渡してみるのが、やはり何も無い。いや、何も無いがあるか……くだらない言葉遊びをしているかもしれないので、オヤジにもらった地図を出す。「さて、じいちゃんの家にはどうやって行くんだ？」

地図をぱっと見た感じでは、駅のすぐ近くにあるように見えるのだが……よく見るとその途中の道の所々を波線が横切っている。さらに、その手書きの地図の右下の隅に『親父の家までは駅から6キロぐらいあるから、がんばれ』と添えてあった。

「……6キロだと！？ 歩けてか！？ しかもロクに日陰は無いぞ！？」

まわりが畑しかないということは、即ち日陰を作ってくれそうなものが無いということである。さらに今日はこの上ない晴天だ。ありがたくないことに日差しは容赦なく降り注いでいる。

「……嫌がらせかよ……あんのクソオヤジ……」

悪態をつきつつも、地図を頼りに歩き出す。正直一刻も早くじいちゃんの家に着きたい。風は吹いていて涼しいのだが、荷物が多い上に、照りつける日差しのせいで余計な汗をかいてしまう。

しばらく地図に従って歩いて来たが、おかしいことに次の目印が一向に見つからない。おまけにどうも鼻屑目に見ても、建物の数が減ってきている。これはまさか……地図が間違っている？ つまり……

道に迷ったようだ……

「ちくしょう！ なんで地図間違えてやがんだ！ あんのクソオヤジ！ だいたいどう考えても道を覚えてるわけがないやつを見知らぬ土地に放り出して、手書きの地図を押し付けて『がんばれ』はお

かしいだろ！」

だがどれだけ文句を言っても当のオヤジはここにはいないし、何か事態が好転するわけでもない。

「まいったな……」

とりあえずは道が分かりそうな人を探したい所だが、あいにく周囲に人影はない。仕方がないので、来た道を引き返すことにする。もしかしたら目印を見落としていた可能性もあるわけだし。

そして、来た道を引き返していく。だがどう見てもオヤジの地図に書かれている目印は見つからない。

「勘弁してくれよ……」

俺は途方にくれて、バス停のベンチに腰を下ろした。ちなみにこのバス停、一日に五本しかバスが来ないらしい。

そして、近くにあつた自販機でジュースを買って、それを飲んでいると、不意に誰かに声をかけられた。

「……あの、もしかして佐倉君？」

「え！？」

顔を上げると、そこにはこの近くの高校の生徒だろうか、制服を着た俺と同じ年ぐらいの女の子が立っていた。

「なんで俺の名前を知ってるんだ！？」

「やつぱりよーくんだ〜！」

「俺の質問に答えてくれ！」

「え〜、わたしのこと覚えてないの〜？」

改めてこの女の子を観察してみる。背丈は普通ぐらい、やや長めの髪をそのまま垂らし、前髪はヘアピンで留めている。そしてくりくりした目でじつと俺のことを見ている………けっこうかわいいな、だが……

「すまんが全く記憶にない。」

「が〜ん……忘れちゃったんだ〜……」

……知り合いにこんな愉快な脳ミソをしているヤツっていたっけか？

「隣に住んでたのに……」

隣に住んでた……？

「……………物井か？」

「やったああ！ 思い出してくれたあ！」

どうやら正解らしい……

「本当に物井なんだよな？」

「そうだよ」

正直言うと、俺の記憶の中の物井天音は、こんなにテンションが高いやつでは無かったはずだ。

もっと引っ込み思案で、しょっちゅう泣いていた記憶がある。

「あの『泣き虫天音』だよな？」

「がーん！ がんばって泣き虫は克服したのに！」

女の子の目が潤みだした！

「だーっ！ 泣くんじゃねえ！ やっぱりお前は物井だ！ 間違いねえ！」

「うっうっ、信じてくれた？」

「この程度で泣くんだから間違いないだろ。」

「それで、どうしてよーくんがここにいるの？ そんなに荷物を持つて。」

「オヤジの書いた地図が間違っててじいちゃんの家が見つかんねえ。」

「そうなの？ 地図見せて？」

「ほい」

物井に地図を渡す。

「それで、どこが間違ってるの？」

「この目印が見つからねえ。」

「あゝ、このお店はね……去年潰れちゃったんだよ……」

「そりゃ見つからないわけだ……」

「それで、そんなに荷物がある理由は？」

「あー、いろいろあつてな……しばらくじいちゃんの所に厄介になるんだよ。」

「おおつ！ よーくんかむばっく！」

「……お前、英語になってねえ。」

「つてことはまたよーくんがお隣さんに」

「まあそういうことになるわけだが……」

「あつ、つまりよーくんはおじさんの家に行こうとしてたんだ！」

「気づくの遅いよ！」

「よーし！ そしたらわたしが道案内してあげるよ！」

「……ちよつと不安だが頼むよ、なんせオヤジの地図は当てになんねえし……」

「まっかせなさい！ じゃあしゅっぱーつ！」

そして俺は物井の後について歩き出した。

日は傾いているが、まだまだ日没までには時間がありそうだ。



## 1・C-dur（後書き）

いかがでしょう？

インスピレーションが湧いたなら、それが最高です。

また、そうでなくても話の続きが気になるのではないのでしょうか？  
その続きは、あなたが作ってください。

それではまた

## 2・A・m o l l (前書き)

二つ目です。

どはむむむ

## 2・A・m o l l

これで四度目だ。

付き合いだしたはいいものの、最後には『あなたとはもう付き合いえない』という言葉とともに、別れを告げられる。

自分自身は、いたって平均的な人間だと思っている。容姿も、頭の良さも、背の高さも、人との付き合い方も、どれをとっても人より劣っているとは思わないし、優れているとも思わない。友人達も、自分に特に何か問題があるとは言わなかった。むしろ、そこまで同じような方をする方が不思議だと言っていた。

自分には何が足りないのだろうか。何がいけなかったのだろうか。それを探すために旅に出よう。冬であるが、より寒さの厳しい北へ向かって。  
厳しい環境の中でこそ、きっと何かが見つかるに違いない、そう信じて。

自分の乗った列車は、いつもの駅を滑り出すように発車した。

見慣れた景色が後方へと流れて行く。足りない何かを見つけるまで、この街に戻ってくることは無いだろう。

この旅は、目的はあるが明確ではなく、目的地は最初からない、旅。

冬の、旅。『Winterreise』

## 2・A・m・o・l・l（後書き）

いかがでしたか？

今回、話の最後にタイトルをある程度限ってしまうような一文がついているのですが、削るに削れずそのまま残しました。

この一文がないと文章が締まらない、そう判断したためです。

ではまた

教会の鐘が出発の時報を告げる。

ボクは今日、生まれ育ったこの町を旅立つ。ボクの夢を叶えるために。

「……な〜に感慨に浸ってたんだよ！ フランツ！」  
「うぎゃー！」

後頭部を叩かれた。

「ペーターか……やめてよ。」

「まあしばらく会えないんだし、最後の挨拶ってことでいいだろ。」  
「もつと他の挨拶の方法はないの？」

「俺とお前の仲なんだし、こんなんでいいんじゃないの？」

「……せめてもうちよつとましな方法で挨拶して欲しかったよ。」

「気にすんなって、俺も寂しいんだよ。」

「……珍しいね、キミがそんなこと言うなんて。」

「そりゃあなあ、幼馴染と当面会えないんだから寂しくもなるさ？」

「心配しなくてもめちゃんと生きて帰ってくるよ。」

「いや、正直お前みたいにひ弱なやつが途中で野垂れ死にしないか心配で仕方がないんだよ。」

「余計なお世話だよ！ キミみたいな健康の権化から見たら誰だつてひ弱だろ！」

「ま、気にすんなって。……ほれ、お前の親も来たぞ？」

父さんと母さんが到着したようだ。なぜか隣の兄さんもいるんだけども……

「おーし、まあ余計なことは言わないぞ。頑張ってこいよ、フランツ。ウチの名前に泥を塗ったら地の果てにいても説教しに行くからな。」

「心配しなくてもそんなことしないよ、父さん。」

「冗談だよ、俺から言うことは『死ぬな』のただ一言だ。」

「……まあ死なないと思うけどね。」

「それは結構、……ほれ、かあさんも何か言っただけで。」

「フランツ、途中で帰ってきたら許さないよ？」

「……それはどういう意味で？」

「もちろん嫁さん見つかるまで帰ってくるなって意味だよ。」

「それはボクの旅の目的じゃない！」

「あつはつは！ 冗談に決まってるだろう！ まあ、あたしの本心はそっちのほうがよっぽど気がかりなんだけどねえ……」

「なんでそんな深刻な顔するのさ！？」

「だってねえ……アンタ十七にもなるのに浮いた話の一つも聞こえてこないんだもの。親としては心配するに決まってるだろう？」

「それも余計なお世話！」

「ま、期待しないで帰りを待たせ。」

「……本心は帰ってきてほしくないとか？」

「まさか！ まあどつかに腰を落着けるんだったらそれでもいいんだけどねえ？」

「……もう出発していいかな？」

「……待ちなさい、フランツ君。」

「ん？ そういえばアルトゥール兄さんも来てたんだ。」

「忘れないでほしいね……これを持って行くといい。」

「これは？」

「救急袋。中に応急手当用の道具と、息の根を止めるための毒が入っている。」

「……なぜ毒？」

「まあ、いろいろ身の危険もあるだろうから、護身（？）用に……」

「なんでちゃっかり『（？）』があるのさ!？」

「もちろんそれ以外の用途にも使えるからだよ、ふふふふ……」  
「そんなにヤバイ物？」

「一滴でどんな生き物でもコロリ……」

「……薬と間違わないようにしますよ……」

「絶対に間違えないようにしたから大丈夫さ。……じゃあ気をつけて。」

「……ありがとう、アルトゥール兄さん。……それじゃあみんな、行ってきます！」

「気をつけてな」

「死ぬなよ」

「いつでもいいから手紙よこしなさいよ」

「薬と毒を間違えないように……」

見送ってくれたみんなに別れを告げ、町の出口へ向かう。そこには、どこにでもつながっている、どこまでも行ける、道がある。

この町から他の町に向かって続く道を、ボクは歩き始めた。  
まだ見ぬ未来へ、続く道を。



#### 4 . E - m o l l

この村は、もう駄目だ。

村は、今まさに死に飲み込まれんとしている。

全ての始まりは、わずか一ヶ月前、一人の老人が病に倒れたことから始まった。

その死自体は、特に不自然なところは無かった。その老人は、もう年が年だったから、誰も何とも思わなかった。

だが、その直後から死ぬ人が急激に増え始めた。そしてあつという間に村の三分の一が死に絶え、ようやく誰もがこれはおかしいと気づいた。

しかし、時既に遅く、日に日に死者は増えていった。昨日まで元気に働いていた屈強な男が倒れ、楽しそうに笑っていた幼児が息を引き取る。村から逃げ出した人もいる。そして、今や村に残っているのは教会の牧師、雑貨屋の老婆、酒場のオヤジ、そして俺だけだ。地主は、真つ先に逃げ出した。村長は、三日前まで村中の家を見舞っていたが、二日前に倒れ、昨日亡くなった。

俺の周囲の人たちも例外では無かった。まず父が倒れ、続いて妹、そして弟が死に、先日母も死んだ。友人達もあつという間に死んでしまった。

この村に何が起きているのだろうか？ 今、分かっていることは何もない。できることも何もない。牧師はただ神に祈っているが、決して間違いでは無いと思う。こんな状況では、神に祈るより他にできることなど何もないからだ。もっとも、もうすでに神には見放されているような気もするが。

原因不明の伝染病、今はそういうことになっているため、近隣からこの村への立ち入り自体が禁じられたそうだ。調査のための人間が来ることもない。……無論そのこと自体は間違いでは無いだろう。原因が分からず、感染経路もはっきりしない以上、むやみに部外者がこの地に来るべきではない。……分かつてはいるが、どうしても『何とかしてくれないのか？』と言う考えは拭えない。

この先、何が起きるのか分からない中で、ただ一つ分かっていることがある。

……この村は、見捨てられたのだ。

5 . D - d u r

私は旅の吟遊詩人

昨日はあの街 今日はこの村

風の吹くまま 気の向くままに

雲の如くの流れ旅

今日の宿屋は村の酒場

小さな村のしけた酒場

常連、旅人、一見さん どんな人でもいらっしやい

お酒のつまみに 話はいかが？

噂話に言い伝え 話すことには事欠かないさ

なにせ私の生業は 人にいろいろ話すこと

今日のお客は酒場のお客

話のお代はお酒とおつまみ

それだけくればもうオーケー

一晩中でも喋りましょう

あなたが家に帰るまで もしくは酔って寝てしまうまで

愚痴でもなんでも付き合いましょう

雄鶏が時を告げたなら 今晚はもうお開きです

またいつか縁があったなら 別の酒場で会いましょう

それではさよなら また会う日まで

あなたの幸運 お祈りします

私は旅の吟遊詩人

あなたの町の酒場にも

私は行くかもしれません

今、世界は、戦いに覆われている。

もう五十年近く前のある日、とある国で起きた、あるプログラムのバグによる核ミサイルの誤射。それによって、人類史上三度目の世界大戦が始まった。

開始からすぐに、実戦における核弾頭の危険性が知れ渡ったせいか、核に核で報復し続けるという泥沼の事態は回避された。しかし、それまでに何十発かの核ミサイルが撃たれたせいで、世界の多くの土地が放射能汚染に悩まされることになった。核が撃ち込まれた土地に住んでいた人のうち大部分は死に絶え、生き残った少数の人たちも『ヒロシマ』や『ナガサキ』の例に漏れず、放射線障害に苦しんでいる。

そして、そんな事態になっているのにも関わらず、かつての超大国達は戦いを続けていた。多くの国は、とつくに疲弊しきつて戦いを止めているのに、だ。

この国も多くを失った。幸い核が打ち込まれることはなかったものの、空爆によりほとんどの都市が灰燼に帰し、人は戦いに駆り出され、多くがそのまま帰らぬ人となった。

俺も、何もかもを失った。家族、友人、顔見知り……もちろんそんなことは今この国ではごく当たり前のことなのだが。

今、国中には虚無感や無力感が漂っている。『ニッポン』のように焼け跡から大国を築き上げるほどの希望は残っていない。そもそも世界大戦その物がいつ終わるのか見当もつかない。……どうやら『戦争』というパンドラの箱を開けた奴は、希望が外に出る前に蓋を閉めてしまったらしい。

これからどうするか……この壊れかけた世界の全てを記すために、世界を見て回るのもよいかもしれない。人間の愚かさというものを、細大漏らさず後世に伝えるために。

今、焼け跡から、その一步を踏み出そう。

## 7 . A - d u r

僕は、夕日によってオレンジ色に染められた夕暮れの公園で、「彼」に出会った。

「彼」は、公園のベンチに腰掛け、傍らに『論語』を置き、その手に持った『新約聖書』を読んでいたが、僕が「彼」の目の前を通り過ぎようとしたとき、何の前触れもなしに僕を呼び止めた。

「君、何か大きな悩みを抱えているね？」

その言葉に僕は愕然とした。しかし、「彼」は僕の心の動揺を知つてか知らずか、そのまま話を続ける。

「もちろん悩むことは良いことだよ。だけれどそれに囚われ続けてはいけない。」

なおも本から目を逸らさずに「彼」は語り続ける。

「君は、君自身の悩み事に囚われて前に進む気持ちを失ってしまっている。……君自身がそうした状況を打開したいと思うのならば、

また僕のところにおいで。僕はいつでもここにいる。」

そして、最後に一言付け加えた。

「『探しなさい。そうすれば、見つかる。』」

これが、僕と「彼」との出会いだった。

俺は、アイツを許さない。

二年前、俺は心にそう誓った。アイツは俺の目の前で、俺の家族を皆殺しにした。その時の光景は今でも忘れられない。否、忘れてはいけない。忘れたとき、俺の存在意義は消える。……真っ先に親父を斬り殺したアイツは、次に驚きのあまり動けずにいたお袋を殺した。そして、殴りかかった俺の足を斬りつけると、泣きながら命乞いをする俺の妹を容赦なく殺した。それも一息にはなく、一本ずつ手足を斬り飛ばして、なるべく苦しみが長く続くように。獲物をじっくりといたぶるように。

そしてアイツは、「悔しいか？ 悔しいだろ？ 悔しいだろうなあ。悔しかつたら俺に恨みを晴らしにきな。まあそれまでに死ななければの話だがなあ。」といって高笑いしながら、何もできずに床に転がっていた俺を尻目に家を出て行った。

それからずっと、俺はくる日もくる日も心に復讐の炎を燃やし続けてきた。俺から全てを奪ったアイツ、アイツを探し出して、俺の家族が受けた痛みを、苦しみを、恐怖を、何千倍にもして返してやる。それを果たすまでは、死んでも死にきれない。

俺はアイツを探す旅の途中、ある小さな村に立ち寄った。その宿屋で一泊し、そのまま次の街に出発しようと、街の外れにあった修道院の前を通りがかった時だった。



「もしもし？　そこに行く旅の方、ちょっとよろしいですか？」

声をかけてきたのは、その修道女だろうか？　十七、八ぐらいの女が立っていた。

「なにやら心が疲れているみたいですよ？　よろしければお茶でも飲んでいきませんか？」

……なんだこいつは。

「あいにくだが先を急いでいるんでね。断らせてもらうよ。」

「まあそうおっしゃらずに。なんだかすごい顔してますよ？」

……ずいぶん人をナメた修道女だな。

「んなことはどうでもいいんだよ。とにかく俺は先を急ぐんでね、行かせてくれ。」

「だめです。えいっ！」

服を掴まれ、そのまま修道院の中に引きずりこまれてしまった。

「なにしゃがる！　ふざけんな！　離せ！」

「だめです。なんかあなたは人を殺しちやいそな気がするんです。」

「

……なんだと？」

「ほら！　目がとっても怖いですよ！」

……とりあえず深呼吸をして、心を落ちつける。

「で、なんでそう思った？」

「カンです！」

「……………ハア！？」

「なんとなくそんな気がしました！　神に誓ってウソは言いません！」

なんなんだコイツは……そんなもんで見ず知らずのヤツをとっ捕まえるのかよ……

だが、この時、俺の運命の歯車は、全く別の方向に回り始めていた。それに気づくのはもっと先のことだったが。



ここはなんと美しい場所なのだろう。

私は、この大地を貫く山脈の中程、高原の奥にある開けた盆地にたどり着いた。そこでは、突き抜けるように晴れ渡った空を背景にして、名も知らぬ花々が咲き乱れ、その花畑の中を清らかな水の流れる小川が流れ、そして山の裾を覆うように森があり、小鳥たちが飛び交っている。

さすらいの果てに、たどり着いたこの地。ここには人はいない。小さな小屋を建て、晴れの日は畑を耕し、雨の日は雨音に耳を傾ける……そうして日々を過ごすにはちょうどいい場所だ。

しばらくこの場所を散策していると、ちょうど良い木陰を見つけた。花畑の中央にポツンと立っている木、いかなる理由でこの場所に一本だけ生えているのかは分からないが、まるでここに小屋を立てると言わんばかりに堂々と枝を広げている。

荷物を下ろし、木陰で休んでいると、今までの様々な思い出が頭をよぎる。だが、もうそれはただの思い出に過ぎない。もう過ぎ去った過去のものでしかない。

しばしのうたた寝の後、目を覚ませば、疲れがとれた体は、活動を要求する。

さて、まずは森に木を見に行こう。小屋の材料になるちょうどいい木に目星をつけておけば、明日からの小屋作りが多少ははかどるにちがいない。

太陽は、心地よい午後の日差しをこの大地に投げかけている。

どうやら気づかれてはいないようだ。

今、俺の前に目的の部屋のドアがある。この向こうに今回の目的であるブツがあるらしい。

扉を静に開き、部屋の中に侵入する。部屋の中にもやはり誰もいない。ここまで首尾よく進みすぎると、かえって敵の作中に嵌まってしまう気がしないでもない。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。目的の部屋へ到着した。」

『『アンタレス』から『リゲル』へ。そのまま部屋の中央にあるセントラルコンピュータへ進んでください。』

「了解。」

そして指示通りに部屋の中央に配置してある巨大なオブジェクトに向かって進む。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。標的の前に到着。」

「了解しました。それではその装置の下部にメンテナンス用の、内部への入り口があるのでそこから標的の内部へ侵入してください。」

「了解。」

装置の下部を調べると、一ヶ所だけ四角い蓋のような箇所があった。そこに吸盤を貼り付け、取っ手を作り、それを手前に引っ張ると割と簡単に蓋が外れた。そこから内部に侵入し、蓋を閉める。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。標的の内部に侵入した。」

『了解しました。ではそこにある配線のうち、『M-03』と書いてある端子を探してください。』

明るさを絞ったライトで配線を辿ってゆくと、目的の端子が見つかった。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。端子を発見。」

「『アンタレス』から『リゲル』へ。それではその端子へ『ガジェット』の端子を接続し、『ガジェット』を起動してください。」

「了解。」

端子へプラグを繋ぎ、『ガジェット』の電源を入れる。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。ガジェットを起動した。」

「了解しました。それでは画面に表示された『実行』アイコンを選択し、五分ほど待機してください。」

「了解した。」

『ガジェット』の画面に表示された『実行』アイコンを選択する。すると画面に「実行中」の文字と、作業の進行状況がパーセントで表示された。

「……なあ、五分も待つのか？」

『もちろんです。』

「それじゃあ暇つぶしにでも付き合ってくれよ。ぶっちゃけこんな暗くて狭いところに五分も閉じこめられるなんて暇過ぎて寝ちまうよ。」

『戻ってくるまでが任務なんだから寝たらいろんなものがトぶけれど?』

「そいつは勘弁願いたいな。つーかよ、なんで今回からコードネームで呼ぶようになったんだ？」

『その前に今までの文章をちゃんと読んできなさい。漢字が間違ってるわよ?』

「……どこがだ？」

『『作中』は『策中』が正しいと思うわ。』

「……んな細かいとこまで見てんのかよ……」

『もちろんよ。今あなたが暗闇の中で大欠伸をかましていることまでお見通しだけれど?』

「んなっ！　なんで分かったんだ！？」

『第六勘よ。』

「結局『勘』なんだな……」

『まあね。』

「で、なんで今回からコードネームを使うことになったんだ？」

『上からのお達しよ。詳しいことは聞いてないけれど。』

「そうかい。で、なんでお前は『アンタレス』なんだ？」

『あら？　私は蠍座の女よ？』

「そんな理由かよ……」

『そう言うあなたこそ、なんでまた『リゲル』に？』

「お前が蠍なら俺は逃げ惑う『オリオン』ってところだろ？」

『あら？　あなたを毒牙にかけた覚えはないのだけれど？』

「言葉の綾だよ。」

『でもオリオンなら星がもう一つあったでしょう？　そっちの方が

有名じゃなくって？』

「あいにく俺は死にそうな年寄りじゃないんでね。」

『いつも年寄みたいにへばってグチばかり吐いてるのは誰かしら

？』

「きつとそいつは俺とそっくりな赤の他人だな。」

『その割にはずいぶんその赤の他人を見かけるんだけどねえ？』

「知らねーよ。運命の赤い糸じゃねえのか？」

『まあそれはないわね。』

「ちよつとは面白い反応を返せよ。つたく、色気もクソもねー。」

『そんなに色気が欲しかったら、いくらでもサービスするわよ？』

「いらねーな。想像しただけで鳥肌がたつよ。」

『そう？　遠慮しなくて良くてよ？』

「ああ、遠慮もへつたくれもねーよ。心の底からの本音だ。」

『まあ、おしゃべりはここまでね。そろそろ終わる頃合いだと思うのだけれど？』

みれば、『ガジェット』の画面には「Task Finished

！」と表示されていた。

「ああ、正解だ。終わってるぞ。」

『そうしたら、プラグを引き抜いて、さっき繋いであったケーブルを繋ぎ直して下さい。』

「まったく、切り替え速いな。」

最初に繋いであったケーブルを繋ぎ直す。

「『リゲル』から『アンタレス』へ。作業完了。」

『了解しました。それでは速やかに合流地点へ移動してください。』

「了解。これより離脱する。」

そして、穴から這い出し、蓋を元通りに閉め、部屋を出ようとしたその時、背後に気配を感じた。

反射的に振り返ると、そこには一人の男が立っていた。

「やあ、お疲れさん。」

笑ってはいるものの、勘が「コイツは敵だ」と告げている。

「アンタはだれだ？」

まともな返事が返ってくることは期待していなかったが。案外あっさりと返事が返ってきた。

「ボクかい？ まあ端的に言っしまえば君の同業者といったところかな？」

同業者か……場合によっては非常に厄介だな……

「先に聞いておきたい。お前は敵か？ 味方か？」

味方ならばここで争う理由はない。だが敵ならば……

「まあ敵になるだろうね。」

「まったく……一番面倒臭いパターンじゃねえか。」

「あー、あまり期待しないで聞くが、お互いに戦う気がないなら、ここは一つ穏便に済まそうぜ？ 俺はとっとと帰って酒が飲みたいんだ。」

「あいにくそういうわけにはいかないんだね。」

「まったく、空気読めよ。それとも空気嫁と遊びすぎて頭がイッチま



「ったか？」

「『読め』と『嫁』を掛けたのかい？ 全く面白くないね。」

「……んなことは解ってるよ。自分で言ってから『やべ、全然面白くねえ』って思ったからな。」

「ま、そういうわけだ。心配しなくてもここに僕の味方はいないから、タイマンでやれるよ？」

「男なら喧嘩はタイマンが基本だろ？」

「そう言いつつ、無線で状況を手短に連絡する。」

「『リゲル』から『アンタレス』へ。敵と遭遇。これより銭湯に入る。」

「あら？ 敵と悠長にお風呂で遊ぶのかしら？」

「ちくしょう！ なんでこういうときに言葉で遊ぶかね！？」

「冗談よ。だけど今回の目的はもう達成されているという事は忘れないように。」

「わーってるよ。『逃げるが勝ち』だってんだろ？ 気に食わねえがな。」

「『勝って』『利益を得る』のが勝利よ。」

「何回聞いたかね、その台詞。どっちにしてもとつとどこを脱出すりゃいいんだろ？」

「ボク、おうちに帰るまでが任務でちゅよ？」

「……うぜえな。敵さんも笑ってるぞ。」

「……いやwww すまないwww 何というか……君たち面白いなwww」

「そんなに面白いのか？ てかお前は ちゃんねーか！？」

「ほら、今のうちに逃げなさい。」

「うつせーよ！」

「と言いつつも、この建物の地図を頭の中で素早く確認する。……逃走ルートは確定した。」

「さて、んじゃとつと撒いて一杯飲みに行きますか。」

## 10・Cis-mol1(後書き)

久しぶりの更新です。

なんか以前もこんなことを書いたような気が……

「おゝい、昭島！ まだか？」

「今行くからちよつと待っててくれ！」

「わかったから急げ〜！ 早くしないとメシ無くなるぞ〜！」

「わりいわりい、んじゃ行こうぜ。」

「おうよ。」

俺は昭島仁。あきしまひとし現在高校二年生。中の上ぐらいの高校に通う、その中でも中ぐらいの出来の学生だ。

二年間、友人に恵まれたおかげで高校生生活は楽しく終えられそう  
だ。まあ彼女でもいればもっと楽しいんだけどな。

昼休み、いつもの仲間たちとつるんで屋上で昼飯を食いつつ喋る。  
まあ話の中身は推して測るべし、どうせ男子高校生が女子のいない  
ところで話すことなんて、まあそんなもんさ。

俺が空を見てボーンとしていた間、親友たちは例によってくだらな  
い話題で盛り上がっている。

「なあなあ、はいじま 拝島。」

「ん？ なんだよ？」

「お前彼女とどうなってるのさ？」

「ハア？ なんでお前らに言わなきゃなんねーんだよ！」

「ほらほら、そこは親友のよしみでさあ。」

「さてさて、お前が告る手伝いしたのは誰だったっけな〜。」

「ちくしょう！ 言わなきゃだめか！？」

「そりゃあ」  
「ねえ？」

拝島を追い詰めている二人はニヤニヤ顔をしている。どうも拝島のノロケ話を聞きたくてたまらないらしい。それにしても彼女ねえ……正直な話、俺にも気になる人はいる。まあたまに挨拶を交わす程度だし、向こうからしたらただのクラスメイトなんだろうな。それでも挨拶ができるだけ俺にとっては上出来なんだがなあ……

……………ん？

「さてさて、昭島君。君は一体何を考えているのかな？」  
「うおっ！？」

いつの間にか拝島の尋問を終えた二人が、先ほどのニヤけ顔で俺の顔を覗き込んでいた。

「その目はね」

「恋してる目だねえ」。

「勝手に決めるな。」

「ほらほら、照れない照れない。で、相手は誰さ？」

「だから勝手に決めんな。」

こういうときは下手に否定すると帰って面倒なことになるのが普通なので、そのままスルーすることにする。

「ほら、もうすぐ授業始まるぜ？」

「おわっ！」

「なんと！」

『こりゃヤバイ！』

いつつも思っんだが、この二人は漫才でもやっているように息がぴったりだ。こっそり裏で練習でもしてんのか？

慌しく教室に戻って行った二人の後に、屋上に残されたのは俺と拝島だ。

「大丈夫か？ 拝島。」

「大丈夫さ。どうせあの二人はいつもあんな調子だしな。もういいかげんに慣れたよ。それじゃ俺らも行こうぜ？」

「だな。」

そして教室に戻ると、五時間目の授業が始まった。科目は日本史。なんでこんなに眠くなる科目を昼飯の後に持つてくるんだろうな……あまりにも暇なので、教室の一番後ろという座席の特権を生かして、他の生徒の様子を観察することにする。さっきの二人は、何やら紙をやり取りしてはニヤニヤ笑っている。一体全体あの紙の中には何が書いてあるんだ？

視線を拝島に移す。奴は予想通り爆睡している。しかしそれにしてもよく教卓の真っ正面で寝れるよな…… 拝島曰く、『むしろ見づかりにくい』だとか言ってるが、精神的には一番キツイ場所だと俺は思うんだよ。まああいつは『眠くなるのに時間も場所も関係ないです！』とか先生の前で高らかに宣言するやつだしな……

俺の視線は拝島からある女子へと移る。彼女の名は羽村楓。はむらかえで 拝島とさっきの二人による評価は『普通にかわいいおにゃのこじゃね？』だそうだ。まあ確かにずば抜けてかわいいわけではない。ただ、すごくよく笑う。それもとびつきの笑顔で。そのせいか知らないが、彼女の周囲には人が絶えることはない。

何を考えるわけでもなく彼女を見てみると、突然こちらを振り向いたので慌てて目を逸らす。そのままそれをやり過ごす。さすがにまた彼女を眺めていてもしょうがない。すると特にすることも無くなってしまった。……センセ、もうちょっとでいいから授業を面白くしてくれ。頼む。

今日の学校生活も無事に終わる。俺は夕日が赤く染め上げた廊下を、ヨレヨレになって歩いていく。

なぜかって？　俺が宿題の存在を忘れていたため、当然のように宿題忘れとなり、今の今まで先生の監視の下、必死に宿題をやっていたからだ。にしてもアイツ、今日の宿題までやらせることはねえだろ…… おかげで最終下校時刻目前だよこんちくしょう……

教室に戻ると、ほとんどの生徒は既に下校（帰宅じゃないぞ？）しているようだった。そして、そのまま自席に戻って、荷物を持って帰ろうとしたとき、あるものを見つけてしまった。

羽村の座席のところに人が座っている。まあ羽村本人なんだからどうもなにかの書類の整理をしているらしい。

「羽村、何やってんだ？」

羽村はこちらを向くと、驚いたように話し始めた。

「え？　……あれ？　まだ帰ってない人がいたの？」

「……今まで熊川先生にとっ捕まくまがわってたんだよ。」

「あー！　宿題忘れたんだ！」

「そういうこと。ったく勘弁して欲しいぜ……明日提出の宿題までやらされたよ。」

「きつと明日は忘れないようにっていう思いやりじゃないのかな？」

「そうとは思えなかったんだよね……で、お前は何やってんだ？」

「あゝ……それがわたしがちょっとヘマしちゃって、委員会の書類をぐちゃぐちゃにしちゃったから、処理済みの書類とそうじゃないのとを今日中に分けないといけなくなっちゃって……」

「委員会の他の連中は手伝ってくれなかったのか？」

「うっん、みんなにはもう帰ってもらったの。ドジ踏んじったのはわたしだし。」

「……手伝うよ。」

「え？ 気にしないでいいよ？ ほら、もうこれだけだし！」

そう言っただけで彼女が俺に見せてきた書類の束は、どう見ても『これだけ』で済む量ではない。

「そんだけの量がすぐ終わるわけないだろ。ほら、貸せ。どう分ければいいんだ？」

そういつて書類の半分ぐらいを勝手に取り分け、彼女の前の席に座る。

「あ……じゃあハンコが押してあるのをこっちの机、押してないのはこっちに置いて？」

「わかった。」

そして、黙々と書類を仕分ける。喋らずに真面目に仕分けていたはずなのだが、それでも三十分ほどかかってしまった。

「ふう、やっとか。」

「お……終わった！ これで帰れる！」

羽村は、仕事が終わった後の達成感を湛えた笑顔をつかべて伸びをする。

「……帰れないとは思わなかったのか？」

「うん……でもわたしのせいでみんなが遅くなっちゃったら悪いし……」

「それでお前が遅くなってどうすんだよ？」

「わたしは遅くなっても大丈夫だから……」

「そのほうがよっぽどみんな困ると思うぞ？」

「そうかなあ？」

「……まあいいや、その書類、どうすんだ？」

「あ、このあと生徒会室に持っていくんだけど……」

「普通に考えてもう鍵閉まってると思うぞ。」

「だよな……どうしよう……」

「とりあえず先生に預けておいたらどうだ？」

「おおっ！ ナイスアイデア！ それじゃあ職員室に行こう！」

「……俺も行くのか？」



「うーん、手伝ってくれるとすごく助かるんだけど……わたしまた書類ごっちゃにしそうだし……」

こ……断れない……

「……分かった、行くよ。」

「ありがとう！ それじゃあ早く行こう！」

とりあえずその笑顔と困った顔は反則だと思う。なんかつい手伝う気になってしまった。……あー、まだ熊川先生職員室にいるのかな……

そして、職員室に書類を持っていった後、俺と羽村は帰り支度をして、校門に向かっていた。ちなみに俺は熊川先生に『これでもし明日宿題を忘れたら、俺はお前のことを当分ネタにするからな？』と微妙に脅迫されてしまった。

隣を歩く羽村が、若干ふらつきながら何やら小声で呻いている。

「ふえええ……もうこんな時間だよおおお……」

「一人でやってたらもつと遅かっただろうな。」

「うーん……やっぱりみんなに手伝ってもらった方がよかったのかなあ？」

まあ今更どういっても後の祭りだがな。どっちにしても仕事は終わってるし、終わりよければ全てよし、でいいんじゃないのか？

校門をくぐる。そこで多分道が分かれるはずだ。

「んじゃ気をつけて帰れよ。」

「うん、今日は手伝ってくれてありがとう。えーっと……ごめん、名前、教えてくれる？」

羽村はやや申し訳なさそうな顔で、俺の名前を聞いてくる。

「昭島。」

「昭島くん、ありがとう。それじゃあまた明日ね！」  
そう言って羽村は俺とは反対の方向へ歩いて行った。とびっきりの  
笑顔を残して。

俺は、しばらくその場から動けなかった。

ここは、どこだ？

俺は、先ほど目を覚ました。覚えていた最後の記憶は、いつもの通学路を歩いてきた記憶。だが、そこからぶつとりと記憶は途絶え、気づけばどこかの屋敷の、狭くはなく、されど広くもない部屋に転がされていた。

部屋にあつた鉄格子付きの窓から外を覗いてみると、どうやらこの建物の敷地と思われる長閑な、しかし恐ろしいほど命の気配といったものを感じさせない庭園があり、その先には海が見える。ただ、その海の見え方は、どうやらこの屋敷が高台に建っているらしい、ということ告げている。

部屋の中にあるものを見てみる。そこには、粗末なベッド、年代物のような古風な椅子、そしてなぜかそれだけ真新しい小型のテレビがあつた。ただ、リモコンはどこにも見当たらない。さらによく見てみると、電源があつたであろう場所には、プラスチックで塞がれた穴の跡があつた。他には何も無い。

ドアを開けようとしてみるが、どうやら鍵がかかっているらしく、開く気配がない。しかも鍵穴はどこにも見当たらない。

部屋を出られず、することもないので、ベッドに腰掛け時を過ごす。ふと時計を見ようと思い左手首を見てみると、そこには時計は

なく、代わりにぴたりと手首に巻きついた、金属質の光沢を放つ銀色の腕輪があった。しかしこの腕輪、継目がない。一体どうして時計の代わりにここにあるのかも分からず、どうやって装着されたのかも分からない。ともかく、今分かっていることは、この部屋からは出られないということ、時間を知る手段はないということ、それだけだ。

やがて日も傾きかけたころ、突如として小型テレビの電源が入った。その画面には、誰かのシルエツトが映し出されている、その体格、髪型からして男であろう。すると、その人物は、おもむろに語り出した。

『ごきげんよう、諸君。どうかね？ ゆっくり休んで頂けたかな？』

その人物は、少々間を置いてから再び語り出す。

『今から君達にはとある『ゲーム』をしてもらう。ルールはさほど難しくはない。……今、君達がいる屋敷の中には、君達自身以外に十二人、全員で十三人の『参加者』たちがおり、その中には一人だけ、『鍵』である者がいる。君達が、その『鍵』である人物を探しだし、その人物と二人だけで屋敷の玄関にやってくれば、『ゲーム』はその二人の勝ちだ。』

そして、その人物は、意味ありげに間を置く。

『そして、残りの者、つまり敗者には死んでもらう。』

命を賭けたゲーム、どうやらそういうことらしい。

『もっとも、それだけでは確実に他者を殺して回る輩が現れると思

われるので、君達に制約をつけておく。一つ、『鍵』を殺す者が  
出た場合、その者は即座にゲームオーバー、残った者を勝ちとし、  
殺害者はその場で命を絶たせてもらう。もちろん殺した相手が『鍵』  
ではなかったのならペナルティーはなしだ。一つ、『鍵』が不慮  
の事故により死んでしまった場合、この場合は生き残っていた者を  
勝者とみなす。……以上でルール説明は終わりだ。』

シャレにならない。『鍵』にさえ当たらなければ何人殺そうが勝手  
ってか？

『最後に、君達にヒントを与えよう。この屋敷のほとんどの扉には  
鍵がかかっている。そこで、今君達の左手首についている腕輪だ。  
それは君達が敗者となった場合、あるいはルールを破った場合に君  
達の命を絶つためのものでもあるのだが、それと同時に電子キーと  
しての機能も備えている。ただし、それによって解除できる扉は人  
によって異なる。ただし、一階のキッチンだけは誰でも入ることが  
できるので、食事の心配は要らない。その他にも何ヶ所か誰でも入  
れる場所があるが、それは君達自身で探し出してくれ。』

その人物は、一息置いて話を締めくくる。

『もしルールが分からなくなった時には、このテレビの乗っている  
机の引出しにルールを書いた紙が入っているので、それを見ろとい  
い。』

それと同時に、引出しから鍵が解除されるような音が聞こえる。

『さあ、『ゲーム』を始めよう。誰と手を組み、誰を騙し、誰を見  
捨てるのか。その醜い生への執着でもって、私を楽しませてくれ。』

そして、テレビの電源が落ちた。

とある街を見下ろす高台にある公園、そこに一人の青年が現れた。

夕方、太陽が空をオレンジ色に染めてゆく。それにつれ、街もまたオレンジ色のベールを纏ってゆく。そして、その青年はオレンジ色の空気が立ちこめる公園の一角にあるベンチに腰を下ろした。

待ちを眺めている青年の横顔は、どこか未知のものをみて好奇心に駆られる子供のようにもあり、またあるいは過ぎ去った過去を懐かしむ老人のようでもある。

その青年の横を、一匹の猫が通りがかる。しかし、青年が突如立ち上がったも警戒する様子はない。……いや、もしかしたらその存在を認識していないのかもしれない。先ほどから公園を通り抜けてゆく、仕事帰りのサラリーマン、買い物袋を提げた老人、おしゃべりしながら家路を急ぐ学生たち、手をつないで歩く母子……その誰もが青年が『そこにいる』ということに気づいてはいないようだ。

青年の向こうに広がる空は、ちょうど西に当たるのだろう。今まさに山の向こうに沈みゆく太陽が、まるで線香花火の先端にできる玉のように揺らぎながら、その姿を少しずつ隠してゆく。青年は手すりに体重を預け、食い入るようにその光景を見つめている。

やがて太陽が沈み、夜の帳が下りはじめる。すると青年は、先ほど腰掛けていたベンチに腰を下ろすと、ポケットから巾着袋を取り出した。

青年は、その巾着袋の中から何かを取り出す。それはビー玉のようなものようだが、それとは違い、かすかに海のような深い青色の光を放っている。そして、青年がその中を覗き込むようにじっと見ていると、光の色がオレンジ色に変わり、青年の手を離れて宙に浮いた。

青年は次々にビー玉のようなものを取り出しては覗き込んでゆく。よく見れば、その中に何かの映像が映し出されていることに気づくだろう。その映像はひとつひとつ異なっているようだ。

いま青年が取り出したものには、なにやら怒っているサラリーマンのような男性が映し出されている。そして、その映像は、頻繁に足元の床を映し出しては再びその人物の顔を映し出す。さらにその映像は、途中からまるで涙で視界がぼやけるように曖昧になっていた。

次に青年が取り出したものには、病院のベッドのようなものに寝ている一人の老人が映っている。その老人は、安らかに目を閉じている。やがてその視界に医師と思われる白衣の人物の姿が入ってきて、残念そうな顔で何かを告げた。その直後、急速に布団が近づき、暗闇に覆われる。最後の一瞬、先ほどと同じように映像は滲んでいた。

そして、青年は次々にビー玉のようなものを取り出してはそこに映る映像を見、オレンジ色に変化したそれを宙に浮かべてゆく。

今青年が持っているものには、一人の男性の姿が映し出されている。そこに映っている男性は、ひどく申し訳なさそうに何かを言う



と、そのまま背を向け人混みの中へと消えて行った。その映像はいつまでも男性が歩いて行った方向を映しつづけている。……やがて、街の灯りがぼやけ、ハンカチのようなもので視界が覆われた。

青年の持つ巾着袋の中身が空になった。いまや青年の周りは、夕焼け空を写し込んだようなオレンジ色の光を放つ小さな玉が無数に浮かんでいる。

青年はベンチから立ち上がると、先ほど夕焼けを眺めていた場所へと移動した。するとビー玉のようなものたちも、それにしたがって青年の後を漂ってゆく。

青年の眼下には、夜の帳に包まれた街の夜景が広がっていた。繁華街の付近は煌々と光を放ち、住宅地はポツポツと小さな灯を無数に灯している。

「さあ、持ち主の所へお帰り。」

青年がそうつぶやくと、オレンジ色に輝く玉たちは一斉に街へと飛び去って行った。あるものは繁華街の方へ、あるものは住宅地の方へ……。青年はしばらく街の方を眺めていたが、やがてその夜景に背を向けると、公園から立ち去った。

そこに、「何か」がいる。

新月の夜、肝試しをしようと友人の一人が言った。それにのって十人ぐらいで深夜の学校にやってきた。

ルールは簡単。昼間のうちに屋上に置いておいたチョークの欠片を持って戻ってくるだけ。ルートは固定、特に何もなく終わる、はずだった。

俺は、屋上に登る階段にいくため、廊下を歩いていった。すると、俺の本の10メートルほど先に人影があった。最初、てっきり前の奴がビビってノロノロしている間に追いついてしまったのかと思った。

だが、5メートルほどの距離まで近づいて、そこでふと何かがおかしいことに気づく。そこにいる「何か」は、決して俺の友人ではなかった。まず、体格が全くあわない。今目の前にいる「何か」は、あまりにも、もはや異常にとと言えるほどに細い。少なくとも男子学生の体格ではない。さらに、今目の前にいる「何か」が異常であると言える点を挙げるとすれば、こいつには『影がない』。確かに今日は新月の夜だが。ここは曲がりなりにも都会、道路の街灯の灯りが教室越しにわずかに差し込んでいる。それに、非常口の方向を示すあの緑の看板も、微々たるものとはいえ光を放っている。それなのに、近くにある消火器にはある影が、これにはない。

本能は、逃げろと全力で警鐘を鳴らしている。だが、足が動かな

い。まるで俺の足が床の一部であるかのようにそこから1ミリたりとも動かすことができない。

そこに存在しているのかさえ定かではない「何か」は、俺の方へ滑るように、少しずつ、近づき始めた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2983w/>

---

Preludes

2011年11月24日12時48分発行